

# なぜ親子孫講座、大道仮説実験講座を始めたか

上田仮説サークル資料

2023年1月28日

渡辺規夫

## 私はなぜ楽知ん研究所の事業に加わったか

直接の動機は退職後も仮説実験授業をやりたいからである。しかし、なぜやりたいのだろうか。一番は昔から追求しようとしてきたことがここにありそうだと思ったからだと思う。それは何か。それはよりよい社会をつくりたいということである。

## 社会の縮図——仮説実験授業

どうすればよりよい社会がつかれるか。これはなかなか難しい問題だ。50年以上追求してきた結論は、それは政治的、行政的な方法では実現できないということだ。政治や行政は、事態を悪化させないことはできるが、事態をよくするにはほとんど役立たないということが私の到達した結論である。

ではどうすればいいか。そのヒントが仮説実験授業にある。仮説実験授業をしている教室は社会の縮図である。板倉さんは現在の教育を改善するために仮説実験授業を提唱したのではない。社会をよくするために提唱したのである。そんなことをうっかり言うとレッテルを貼られて、思うように普及させられなくなるので、あたかも学校教育の改善の提案であるかのように、提案していたのだろうと思う。そして仮説実験授業が普及していき、単なる授業の改善ではない領域に足を踏み込むべき段階になって板倉さんは亡くなったのである。

## 楽知ん研究所の意義

仮説実験授業は社会をよくする運動である。しかし、社会教育のイベントとして科学講座をやっても、その影響は限定的で、持続不可能である。社会をよくすることにはほど遠い。

社会をよくする持続可能な事業としていくためには、その目的に合わせた組織をつくる必要がある。そうしたことを扱っているのが楽知ん研究所である。そう考えて楽知ん研究所のサポーター会員になり、まもなく運営サポーター会員になった。

## 親子孫講座ではノーミソが喜ぶ場を売っている

(宮地)

「親子孫講座は、授業書や実験セットの授業というサービスの代価としてお金をいただいている」

という誤解をしてる主催者がいるのではないのでしょうか？

親子孫講座は。授業書や実験セットを介して、そこで参加者の脳ミソが動いて、たのしいなあという場を提供することでお金をいただいているのです。そして、その場は、参加者がつくるといことです。お金をいただいている参加者自らが、その場をもっとたのしい場に参加することによってできる、〈脳ミソが喜ぶ場〉を売っているということです。そういうことが十分に理解できれば、講師に知識がないなんてことは、何の問題もありません。

〈人間が人間として学ぶに値することを学ぶ場〉を提供することで、お金をもらうという事業が親子孫講座なのです。もちろん、〈脳ミソが喜ぶ場〉に確実にするための束縛として、授業書や実験セットと、仮説実験授業があるわけで、その品質を高く高く高めることは、ボクらの仕事ですが、そんなことは商売としては当たり前のことです。

講師は、知識を与える人ではありません。知識を与えるのは授業書です。その授業書の展開どおりに、伝わるようにするのが学校の授業での教師の役目ですが、親子孫講座版の授業書は、それさえも授業書に書いてあります(^\_^;)。だから、講師の役目は、その場が発言しやすい雰囲気、明るい空気、何を言ってもバカにされない安心感をかもしだす、笑いの絶えない場をつくる、まさにMCの役割でしかないわけです。

参加者は、お金を払って、そういう場に自分を置いて、さらに自分でその場をもっとたのしいものにする能動的な働き（発言することだけでなく、発言しなくても感想を書くこともそうです）をすることで、もっとお得になる……ということです。そういうことがわかってくると、たのしみ方がまるで違います。コンサートやスポーツ観戦では、ファンが自ら、タオルや垂れ幕やてづくりうちわを持って応援します。

それと同じで、参加者は、発言したり、予想変更したり、感想を書いたり、いろんなことで、よりその場がたのしく充実したものにするができる……というのを、もっと伝えることが、うまくできないのかなあ？……と考えています。

## 親子孫講座では自由になるための束縛を売っている

(宮地)

勉強も、あーんと口を開いていれば、そこに学ぶものが入ってくるサービスだと、勘違いしている人が、どれだけ多いことか。塾業界がここまで大衆化してしまって、この20年間は、それがもう徹底的に広まってしまったのが日本だと思っています。

本格的な教育は、そんなものではないです。自分で動かなければ、学ぶことはできません。だがしかし、それは放任していても、自分から学ぶことなんてできないのが人間です。そういうことを伝えられるのが、親子孫講座なんだと思います。それが「科学教室」との違いでもあるでしょう。

親子孫講座が売っているサービスは、知識を伝えることなんかじゃないです。たのしく学ぶ場を参加者がつくっていく、そういう場を提供するサービスなのです。

もっと言えば、我々が売っているのは、参加者がおもわずたのしく学べるような場を参加者がつくっていくための束縛＝親子孫講座版の授業書、実験セット、講師のMC、通信などなどという「束縛」を売っていると言ってもいいと思います。その結果、参加者に自由になっていただく。そういう構造を売っている。

## 教育委員会への対応

(武藤)

私たちの事業は、そこ＝「人間が人間として学ぶに値することを学ぶ場を提供すること」に意味があるので、各地の主催者が1つの講座を実施するという単独の事業として見た場合には、まず理解されることはないでしょう。

わかりやすい子どもの科学教育でも、親子の生涯教育とも全く違うと思います。でも人は、未知のものをみたときにすでにあるもの、自分が体験したことに、置き換えてイメージしてしまうことが多いんじゃないかと思います。なので、教育委員会の申請のようなどころにはおそらく理解されることを期待できません。

でも、私たちはそれぞれの地域で、まだ出会っていない、そんなことを求めている（かもしれない）親子や大人と出会うために「学校でチラシをまいて広く募集をする」という手段をとっています。そのためには、それぞれの地域の教育委員会の後援が必要です。そこで、その教育委員会が、「ほー、その事業はすばらしい！

私たち教育現場ではとてもできないから 自らやりたいと思って、企画してくれるNPOをせめて応援しよう。お金は一切出しませんが。

というのが本来の後援の姿だとおもいます。

教育委員会の実情としては、その自治体でチラシを配ってする事業や団体を

- ・金儲けをする企画でないか
- ・公序良俗に反する企画でないか

といった目でチェックし、さらに

- ・金儲けでないなら反社会的な団体の勧誘でないか

とも思っているわけです。

後援申請は、教育委員会にとっては、じっさい、担当者の仕事がふえるだけで「おもしろい人材がそだつ地域づくり」をする仕事とは思っていません。

担当者が自分で判断しなくても、すでに社会に実績があるたとえば、演奏会や演劇をやる、とか、スポーツの大会をやる、といったことは単純です。

でも、私たちの現状申請する事業では

- ・事業をやっても、利益はわずか、下手すると赤字
- ・担当者は手弁当

・募集人数も10組以下  
のような感じです。

## 教育委員会は前例踏襲

担当者の気持ちになってみれば、できれば後援申請されたくないわけです。学校だって、積極的にはチラシを配りたくないと思います。

そのうえで、後援の基準に何とかそわせて地域のお客さんと繋がろう、としているわけです。お役所むけの申請書というのは、申請したら、役所は見なくてはなりません。担当者が自分で判断する責任をとらずにすむように対応するので前例踏襲が好まれると思います。

担当者の気持ちにたってみれば、わからなくないと思います。そこは、事業を担当者に理解されることまで望めないと思います。**わたしたちは、新しく繋がりをつくることはチラシ以外の方法ではまだ成功していないのですから、スムーズに通してくれることを第一に考えればいいと思います。**

## 後援申請は事務局の力を借りることも必要

各地の主催者が、事務局の負担軽減を考え「後援くらいは自分で」と思って下さっているからだと思いますが、これも、主催者に直接「承認しない」と連絡があったら、主催者はたぶん、引き下がると思います。「この地域ではダメなんだ」とか。

でも、担当者は、ダメな理由をいろいろ探してくるものです。書式も後援基準も公表していない自治体も多いのに、です。

事務局は、ダメだったらどうダメなのか、どうしたらOKな事業になるか、交渉します。申請書類をつくるなどは、お手伝いします。これまで自力で申請されていた主催者は、前例踏襲のため、今後もお自分でお願ひします。でも、自力で後援申請してみよう、と思ったださる主催者みなさんは、書類は自力でつくっても、申請者は、やはり事務局にしてくださるとスムーズだと思います。

## 親子孫講座の成果

(宮地)

今回、〈世界の国旗〉にはじめて参加されたお母さんは、「自分の考えを人前でしゃべるなんて、大人になってからなかった」と感想に書かれていました。たぶん、ほとんどの大人はそうでしょう。会社でも、まわりに忖度したり、こんなこと言うと、自分の地位があぶないとか、いろいろなことがあるでしょう。PTAの集まりでも、ママ友の集まりでも、そうでしょう。家族の中でも、そうかもしれません。

そして、「自分では発言できなかつたけど、人が言うことを聞いていていろんな考えがあつて、聞くのが本当にたのしいなあ」ということも書かれていました。こういう体験を大人にさせられるだけでも、ものすごいことだとボクは思います。

## フリーメイソンの再現——親子孫講座

1600年代、1700年代の欧米では、宗教や政治のことを忖度して、「自分の考えを人前でしゃべるなんてできなかった」わけです。それを、宗教や政治のことはいっさいしゃべらないというきつい束縛を設定して、自由になれる場として、王認学会やフリーメイソンができ、そこで科学（ナチュラル・フィロソフィー）はどんどん蓄積されていきました。

現代の日本でも、じつはその構造は変わっていないということです。

でも、親子孫講座では、それができる。その束縛をしてるのが、授業書なわけです。授業書にそっての発言なら、何を言ってもとがめられない。それは、何を言っても、最後は実験結果で決まるようになっているからです。

そういう、まさに、現代に、王認学会やフリーメイソンの組織を、再現したのが親子孫講座や、そこからつながっていくファン講座なんでしょう。

そういう場が、「自分の居場所」みたいなものなんでしょうけど、そんな場がなかりょうが、親子孫講座ではできてしまうところが偉大です。

## イベントとしての科学講座ではない

大衆化＝「誰でも仮説実験授業を受けること」だと誤解されている人もいるかもしれません。それだけでは、1600年代から1800年代のはじめの近代科学をたのしんだ特権階級と同じことが再現はされません。たった1回、来ただけで終ってしまったのでは、〈研究と教育が一体化した場〉を感じていただくのはちょっと無理でしょう。

だから、親子孫講座をイベントとしてやるだけでは、それは実現しません。何度もやって、そこから仮説実験授業のファンがつくられていくことでしか、〈研究と教育が一体化した場〉は生まれません。まずは「自分のお客さんをつくる」です。親子孫講座はそのための窓口です。

このことを各地の主催者のみなさんが、どれだけ意識して、納得しているかで、この事業はすべて決まります。

ただ、講座をやるのではないということです。これが、学校の授業との決定的な違いです。いえ、本当は学校教育だって、卒業してからも、その生徒の人生の責任をとるということはあっていいはずですが。仮説実験授業を受けた子どもたちが、どういう大人になって、そこでどういう仕事をして、どういう生き方をしているのか？を問われるはずですが。

でも、サラリーマン教師の限界で、そこまでは保証しないと思っている人が少なくないんじゃないかと思います。目の前の授業だけたのしくやれば、まずそれでよしと。もちろん、それでいいです。だがしかし、それでよくない。

ボクは、学校で仮説実験授業をやっている時でも、もし自分が会社の社長なら、

「この子は採用したい」

「こいつは使える」

「この子は、何かやるだろうなあ」

みたいな視点でしか生徒を見ていませんでした。成績とか、生活指導部のお世話になるとか、そういう判断規準はまるでありませんでした。

退職後に、市民大学みたいなところで、頼まれて、講師をやって、1時間半くらいの時間で、なんとかプロジェクターを使って、仮説実験授業をさっさか（一部は省略して）やるようなことをやるのでは、サラリーマン教師と党派性は、なんらかわらないと思っています。

そして、そういうのを「学校外の仮説実験授業」と思ってるんじゃないでしょうか？

親子孫講座は、そういうことをやろうとしているのではないということです。

### この事業は時間がかかる 早く始めることが肝心

仮説実験授業なんて、あくまで道具です。問題はそれを体験することで、たのしい未来、社会をつくっていく人間がどれだけ出てくるか……これが最も大事です。そのために、認識論、組織論を学ぶことがどうしたって必要です。それだから、仮説実験授業をやるわけです。というか、人類があみだしてきた科学という考える武器を手渡したいということです。

仮説実験授業をやることは、ただのはじまりに過ぎません。その先こそが、ボクらがやることでしょう。だから、時間がかかります。10年スパン、20年スパンの仕事です。

スタートは早めがいいです。長期投資と同じです。あとで、指数関数的にたのしみは増えます。その一番たのしいことが、たくさん増えてくる状態を見ずに死んだら、もったいないです。親子孫講座は、決して、「学校外の仮説実験授業」ではありません。仮説実験授業の原点に立ち返ったものが、親子孫講座です。

#### 【まとめ】

社会をよくするために親子孫講座をやる。

親子孫講座はノーミソが喜ぶ場を売っている。

親子孫講座はイベントではない。

楽知ん研究所の事業として講座をやる。

時間がかかる事業だから、早くに始めることが必要。

